

バチカン図書館マリオ・マレガ資料群の全体構造

大友一雄

はじめに

宣教師マリオ・マレガ（1902～78）が収集した日本関係資料は、現在、バチカン図書館・サレジオ大学図書館に多くが所蔵される。資料群の全体像は、本来、両者を統一的に捉えることで可能になると考えられるが、両者は所蔵先のみならず収集時期や伝来も異なるため、まずはそれぞれ個別に分析することが適切と判断される。よって、ここではバチカン図書館所蔵のマリオ・マレガ資料群を対象として、資料群が図書館に至るまでの経緯などにも留意しながら資料群の全体構造をアーカイブズ活動の観点から提示するものとする¹⁾。

バチカン図書館のマレガ資料群を原出所とのかかわりで捉えるならば、マレガが日本において収集した資料群、マレガ自身の調査・研究活動のなかで発生した資料群、それからバチカン図書館所蔵後に保存管理活動のなかで付与したとみられる装備具など、以上3つのグループからなる。なお、3つ目はマレガ資料とはいえないが、資料群の伝来、現状を探るうえで重要な情報源と考えられたため、すべて調査対象とした。

この3つのグループは、調査段階では混然とした状態にあったが、全体構造分析では、概要調査および目録記述を進め、資料を発生させた出所（組織・集団・家など）を探り、出所の機能とのかかわりのなかに個々の資料を位置付けることを試みた。本論文はその取組みの一端を示すものであり、階層構造の実際は「マリオ・マレガ資料データベース」において具体化されるものである²⁾。

1. マリオ・マレガの経歴

ここでは資料群の全体像を検討するにあたって、マレガの経歴について行論の範囲で確認しておきたい。³⁾マレガ資料の全体理解では、いつどこでどのような目的から収集し、それをどのように保存管理し、活用したのかといった情報が欠かせないが、マレガ本人の経歴はその分析のための基本情報となる。ついでには、収集資料の情報なども加えながら略歴をあらかじめ示したい。

マリオ・マレガと収集資料の動向

1902年9月30日、イタリア北東部ゴリツィアで生まれる

1918年、サレジオ会入会

1924～28年、トリノ法王立大学（サレジオ大学）に学ぶ。神学博士

1928～29年、イタリア・ヴァラツェ高等学校教諭

1929年、宣教師として来日。翌年、宮崎・高鍋の神学院の教師を務める

1931年12月、大分教会に移る。1933年に海星幼稚園（大分市）設立に関わる

1935年4月、大分教会主任となる

1938年、『古事記』イタリア語訳を出版

主なキリシタン関係古文書を収集

ヴィンチェンツォ・チマッティ神父、キリシタン関係資料34点をバチカンに持参（A26）

1942年、『豊後切支丹史料』（サレジオ会）を出版

1944年、資料・書籍等を大分から宮崎に疎開（チマッティ日記7月2日）

1945年7月、熊本・栃木温泉に留められる（外国人宣教師対象）。終戦まで

1946年、『続豊後切支丹史料』（東京、ドン・ボスコ社）を出版

1947～49年、イタリア（アメリカ経由）へ帰国

1948年、教皇ピウス12世に接見、資料持参（A238）【マレガNo743】

1948～49年、再来日、大分教会就任。別府専門女学校で教師を務める

1949～53年、東京勤務（東京第1期）となる（東京・目黒区碑文谷町居住）

1950年、東京・調布サレジオ神学院（同年練馬から調布へ移設）教師
1951年、東京・調布サレジオ短期大学教師（院長・学長はチマッティ神父）
1953年、収集文書などをバチカン図書館に寄贈（A1～A21）
1953年～1958年、臼杵教会就任
1954年、『豊後切支丹史料』メモ書入れ本をバチカンへ送付
1958年、「島原記録」をバチカンに送付
1959年、東京碑文谷サレジオ教会所属（東京第2期）
1963年、星美学園短期大学専任教授
1974年、帰国
1978年1月30日、イタリアのロンバルディア州ブレシアで没す

マレガの経歴には曖昧な点も少なくないが、おおむね上記の通りである。1953年に資料群はバチカン図書館に寄贈となるため、とくに同年以降は簡略に示した。なお、資料収集は、その後もとくに東京において続けられたようである。サレジオ大学図書館マレガ文庫に見られる古典籍・錦絵などがそれに該当すると考えられる。

経歴は、彼の研究活動の環境基盤や周辺の状況を理解するうえではもちろん、資料群の伝来や構造分析においても有用である。以下、行論のなかで適宜参照をお願いしたい。

2. バチカン図書館所蔵マレガ資料群の全体像

マレガはキリシタン関係の資料をはじめ、日本文化にかかわるさまざまな資料を収集し、また、それらの研究を通じて多くの原稿・メモなどを発生させた。多岐にわたる資料群を、出所を踏まえて構造化するには、資料ごとに存在理由を追究することが基本であり、年代・内容・形態などにも留意しながら構造化を進めることになる。バチカン図書館は、1953年の資料群受入れ後、A1からA21のまとまりとして管理してきたが、共同研究では、その後追加されたA22～A26のまとまりも含めて、すべての資料の出所を検討し、それをもとにグ

ループ化、階層構造化を試みた。ここでは、その検討を踏まえて、01.宗門方、02.諸資料、03.マレガ、04.その他という4つのグループに編成するものとした。01.宗門方は、臼杵藩宗門方役所を原出所とする資料（1万1938件）、02.は宗門方役所以外を出所とする前近代資料（413件）、03.はマレガ自身の著作・原稿・書簡・メモおよび同時代の雑誌・絵葉書など（2236件）、04.その他は、バチカンにおいて資料管理のなかで付与されたものである（56件）。

については、以下、それぞれについて出所である組織・集団・家などを明らかにし、そのうえで発生した記録について考察することにした。

(1) 01.臼杵藩宗門方役所資料

①宗門方の沿革と機能 —3つのグループへの構造化—

マレガによる本資料の収集については、資料を管理した旧藩関係者からの入手、または、古書店などから購入など諸説がみられるが、本資料の入手時期は1938年の可能性が高い⁴⁾。01.宗門方役所を出所とするレコード数は1万1938件（全レコードの81.6%）となる。対象年代は寛永12年（1635）～明治2年（1869）に至り、質量とも充実した資料群である。バチカン図書館の受入れは、1953年、日本からマレガが寄贈したことによる。ただし、これ以外にも1938年にチマッティ神父が持参し、2020年までバチカン文書館が収蔵した資料（A26）、1948年マレガがピウス12世に接見した際に持参した資料（A238 = Vat.estr. or.48）、2016年にサレジオ大学図書館から修復のために受け入れた資料（A24）などがあり、一部には受け入れ経緯が不明なものもある⁵⁾。

出所の臼杵藩宗門方役所は同藩の宗門改を担当した役所である。については、まず臼杵藩のキリシタン統制について簡単に触れておきたい⁶⁾。

豊後国海部郡臼杵（現在の大分県臼杵市）は、大友宗麟（1530～87）の居城としての歴史も有するが、文禄の役 of 失態による大友義統（宗麟の子）の改易後、豊臣系の福原直高が入り、福原が豊後府内に転出した後、文禄2年（1593）閏9月、太田一吉が6万5000石で入った。慶長5年（1600）の関ヶ原の戦い後は、稲葉貞通が美濃国郡上八幡から5万石で転入し、藩主は貞通－典通－一通－信通－景通－知通－恒通－董通－泰通－弘通－雍通－尊通－幾通－観通－久通と

続き、久通の代に幕末を迎えた。天保5年（1834）の豊後国御帳によれば領知は豊後国海部郡に97か村、大野郡に143か村、大分郡に39か村に及ぶ。

豊後でのキリスト教は、天文20年（1551）、大友宗麟がフランシスコ・ザビエル（1506～52）を府内（大分市）に招き、自らもキリシタンとなるなど積極的な対応によって広がり、「高田」（大分市）、「野津」（臼杵市）、「志賀」（竹田市）には拠点も置かれ、組織化が進んだ。しかし、江戸幕府は、慶長17（1612）年にキリシタン禁制を打ち出し、翌年には全国に禁教令を発した。臼杵藩を含む豊後国の諸藩は、幕府の政策によってキリシタン禁制を次第に厳格化し、家中を含む領内の人々に対して仏教への改宗を求めた。臼杵藩では寛永11年以来、宗門改と起請文の作成・提出、五人組の編制によってキリシタン統制を強化したが、その後も潜伏キリシタンの露見が続いた。幕府は寛文4年（1664）11月、諸藩に宗門方の設置を求め、臼杵藩では翌5年に宗門方（奉行）3名を任じた。この部局は幕府宗門改役（宗門奉行・切支丹奉行などとも呼ぶ）の指揮・連携の下に領内のキリシタン統制とその情報を管理する機関であった。業務は年次的に編成され、領内の宗門改・絵踏、幕府への報告、他藩との調整などが定式化していった。元禄2年（1689）の宗門奉行の役料は禄米20俵、下僚（宗門下役）2名であった。宗門方役所資料群は、この役所の活動にかかわる資料群ということになる。

さて、資料群の全体構造把握では、宗門方の沿革、下位の組織構造、機能分担などの検討を要するが、これらに留意した場合、資料群は大きく3つに分けて捉えることが適当と考えられた（後掲表1参照）。判断基準となるのは、寛文5年の宗門方の設立である。三野行徳氏によれば、設置以前は、藩の大組鉄砲足軽頭など番方系の者がキリシタン取締りを担当しており、組織機能的にはその後のあり方と大きく異なることになる⁷⁾。また、宗門方を出所とする資料群のなかに、それ以前の時代のものが含まれる点にも注意が必要である。おそらくは新規の役職が成立するなかで、それまでの関連文書が引き継がれたものであろう。機能的には継承する部分もあるが、組織のあり方が異なるため、前後の資料をどのように構造化するか注意が必要である。

ここではまず、寛文5年以前の資料群（554件）が特定の内容・形式に限定さ

れることから、01.寛永12年宗門改起請文、02.寛永12年宗門改帳、03.寛永12年重而宗門改請状、04.正保3年重而宗門改五人組証文、05.正保3年宗門改証文、06.正保3年重而宗門改証文、07.正保3年御改五人組帳というように、資料名をもってまとまりの柱とした(表1の「(1) 宗門方設置以前」の部分)。資料はいずれもキリシタン取締りにかかわり領内から提出されたものである。

つぎの資料グループは、万治3年(1660)から天和2年(1682)頃にかけてキリシタン弾圧・捕縛が強力に進められた「豊後崩れ」にかかわるものである。多くは幕府宗門改役・長崎奉行・臼杵藩主などの往復文書であり、藩主・家老などによる資料群ともいべき性格である。寛文5年以前の番方系役人や以後の宗門方の名前もほとんど見られない。案件の性格上、宗門方などが関係したことは間違いないが、書類の性格からすると藩首脳部のもつと判断される。おそらくキリシタン統制において大きな転換点となった事件の関係文書を宗門方役所で備えることが必要となり、後に収集、書写することでまとめられた資料群であったのではなかろうか。よって資料群の位置づけでは、初期の文書群に続けて(2)豊後崩れ「08.切支丹吟味」(134件)というグループを設けた。⁸⁾

3つめのグループは、寛文5年の宗門方設置以降に発生した、いわゆる役所文書(1万1250件)である。役所機能に注意して、表では(3)の年次計画事業(毎年恒例化した宗門改、絵踏など)、(4)随時事業(ライフサイクルにかかわる出生・婚姻・移動・死去などや臨時の伺・届など)、(5)対外的事業(幕府関係、他領関係など)、(6)役所事務・通信(事務・役人間通信・通達・経費など)、(7)その他(包紙・断簡・不明など)と編成を試みたが、データベースでは、利用の観点から一覧性を重視し、宗門方のもとに「踏絵」「出生」「幕府届伺」などと、具体的な役割・事項を並列的に示した。

これらは、宗門方の毎年恒例化した活動やライフサイクルなどにかかわる活動とそのもとに発生する情報に注目したものである。情報は、年々幕府宗門改役へ報告する仕組みとなっており、役所はそのために存在したともいえる。

なお、幕府への報告対象とは、キリシタン本人やその子孫・類縁として捉えられた「類族」が対象であり、すべての人々を対象とするものはないが、毎年実施される宗門改・絵踏や、出生・死亡などの手続きは、すべてが対象となっ

表1 マリオ・マレガ資料群構造 —01.宗門方—

フォ ンド	サブ・ フォンド	シリーズ (掛・機能レベル)	ファイル (内容別・簿冊レベル)
マ リ オ ・ マ レ ガ 資 料	01.宗門方 (11,938)	(1) 宗門方設置以前 (554)	01.寛永12年宗門改起請文 (416) 02.寛永12年宗門改帳 (6) 03.寛永12年重而宗門改請状 (8) 04.正保3年重而宗門改五人組証文 (113) 05.正保3年宗門改証文 (5) 06.正保3年重而宗門改証文 (4) 07.正保3年御改五人組帳 (2)
		(2) 豊後崩れ (134)	08.切支丹吟味 (134)
		(3) 宗門方 (年次計画事業) (2,253)	09.宗門改証文 (827) 10.住持替日証文 (39) 11.宗門改毎月仕上書 (179) 12.五人組 (55) 13.家内人数 (520) 14.村内人数 (111) 15.居住改 (22) 16.生死増減 (228) 17.踏絵 (146) 18.類族 (帳) (126)
		(4) 宗門方 (随時事業) (8,058)	19.出生 (1707) 20.改名 (74) 21.養子 (107) 22.引越 (714) 23.婚儀 (314) 24.離縁 (15) 25.出仕 (115) 26.弟子入 (37) 27.逗留 (108) 28.奉公 (38) 29.家内入 (27) 30.他出 (100) 31.欠落 (152) 32.剃髮 (257) 33.帰参 (66) 34.旦那請 (67) 35.旦那替 (210) 36.病気 (25) 37.籠舎・閉門 (22) 38.死亡 (140)

	(4) 宗門方（随時事業）	39.葬儀（30） 40.死骸改証文（3087） 41.宗門改（44） 42.帰着（105） 43.旅人出入（306） 44.住職（33） 45.印判（67） 46.年齢書上（11） 47.諸届（40） 48.諸伺（40）
	(5) 宗門方（対外的事業）（301）	49.幕府届伺（57） 50.他領類族（244）
	(6) 宗門方（役所事務・通信など） （436）	51.役所役人通信（378） 52.役所事務（16） 53.通達（15） 54.役所経費（15） 55.召喚（12）
	(7) その他（202）	56.その他（不明分）（8） 57.包紙（40） 58.断簡（64） 59.反故紙（12） 60.紙片（8） 61.紙繕（70）

た。こうした全住人の取調べをベースに、類族の異同を幕府へ報告することが求められたのである。もちろん、実際に露見などの問題が発生すれば、その対応は宗門方役所に求められたわけである。

さらに宗門方の組織にかかわり一点追加するならば、宗門方下役が交代で江戸詰となっていた。これは幕府への報告・調整などの役割が期待されたものである。国元からの類族異同に関する報告は、まず白杵藩江戸藩邸に届けられ、幕府宗門方との調整のうえで提出が完了することになる。そのため、江戸藩邸では国元と連絡を取りながら幕府への提出書類を書き直すことも必要となった。また、幕府宗門方は全国の類族帳を所持しており、藩からの異同届を踏まえて、類族帳を書き直していたとみられる。そのため、相当微細なレベルで藩担当者との調整が必要になっていた。ちなみに元禄16年（1703）正月の宗門方支配の「切支丹宗門御改ニ付御書物之事」（A16.5.4.3）では、差出人に藤井平内・宇野

九太夫・植田喜助・吉田三内の名前が見られる。宛先は宗門方の奉行3人である。また、宝永8年(1711)正月の同内容の文書(A3.5.7)の差出人も同様であり、この間、下役は藤井平内・宇野九太夫・植田喜助・吉田三内の4人が務めたことになる。

江戸詰については、江戸の植田喜助から藤井平内・宇野九太夫・吉田三内宛の書状(A11.2.4.2.4)、また、宝永8年とみられる8月2日付の植田喜助から国元の宗門奉行3人宛の書状(A11.2.4.2.19)があり、後者では植田の江戸詰の任期が間もなく終了すること、後任の藤井平内の到着を待つことが記される。なお、江戸詰植田から国元に届けられた書状はまとめて伝えられていた(A11.2.4.2)(写真1)。

今後、宗門方役所についての分析が進むなかで、役所機能と生み出される文書の関係についての理解が一層深まることが期待される。



写真1 江戸詰植田喜助書状一括

②「01.宗門方」の第3階層の差出人身分表記について

ここでは、白杵藩宗門方役所を出所とする資料群「01.宗門方」の第3階層の編成項目で、百姓・町人・藩士などの身分表示を、広く採用した理由について、その方法と狙いについて触れたい。

まず、採用した方法を具体的に示すならば、たとえば「01.宗門方」の下位の階層「09.宗門改証文」の場合、「切支丹宗門御改ニ付御書物之事」の書出しで始まる文書数は827件に及び、何らかの下位編成が必要と考えられた。ここでは、その対応として差出人の身分に注目して百姓・町人・寺院・藩士などという下位階層の設定を試みた。アーカイブズ学的にはイレギュラーな取組みと判断されるかもしれないが、つぎのような理由で一定の理解を得たいと考えた。すなわち、宗門方の活動は、藩内の諸身分を対象としており、各身分集団から宗門改・類族改についての文書が提出される仕組みが存在した。百姓の場合は、庄屋・大庄屋から宗門方へ提出され、町人の場合は町年寄から、藩士の場合は家格によって違いはあるようであるが、一般には同職の組頭・頭を通じて提出

されていた。さらに、提出された文書もそれぞれ別個のまとまりとして管理されたことが想定される。したがって、身分を踏まえた資料群編成は、文書群の作成・管理を追究するうえでも、また、文書群の原状を理解するためにも有効と考えたものである。

あらためて既述の宗門改証文の数量に注目するならば、827件のうち469件は「01.寺院」を差出人とするものであり、「02.町人」は3件、「04.百姓」は4件、「05.藩士」346件、「09.不明」5件であり、数量的に大きなばらつきがある。つまり、「切支丹宗門御改ニ付御書物之事」の提出は、基本的には寺院・藩士を主とした制度とも考えられる。「02.町人」、「04.百姓」にみられる文書は、いずれも町年寄・大庄屋によるものであり、禄を得た存在であったため、この文書の提出が必要となった可能性が高い。よって、差出人の身分を編成の基準とする方法は、宗門改の実際を明らかにするうえでも有用である。

以上のような状況から、とくに上申文書の場合、身分に応じた編成は、積極的な意味があると考え、この方法を採用した。

(2) 02. 諸資料

表2の「02. 諸資料」は、宗門方役所以外を出所とする前近代資料群（413点）からなるまとまりであり、「諸資料」という柱立てはあくまで便宜的な設定である。出所を基準とした場合、13以上のグループの設定が考えられるが、利用上の利便性を考え、諸資料を設定した。また、下層の01.白杵藩、02.白杵藩士なども同様に関連の資料群をまとめるために設定したものである⁹⁾。

02. 諸資料のもとに編成した資料群全体は、01. 白杵藩（御納戸・御奥・郡奉行・その他）、02. 白杵藩士（戸上家・生野家・諸家）、03. 白杵藩領、04. 岡藩関係、05. 府内藩関係、06. 大村藩関係カ、07. 杵築町・藩関係、08. 生地・宗近組関係、09. 大坂町奉行カ、10. 駿河国安倍郡腰越村、11. 出羽国最上郡泉田村奥山家、12. 銀札、13. その他などである。13. その他の設定は出所特定が困難なものも少なくなかったことによる。引続きの検討が必要となる。

つぎにバチカン図書館で発見された段階の状態に注目するならば、諸資料も、他の資料グループと同様に一定程度のまとまりで存在したが、一部では散在す

表2 マリオ・マレガ資料群構造—02. 諸資料—

フォ ンド	サブ・ フォンド	シリーズ (掛・機能レベル)	ファイル (内容 別・簿冊レベル)
マ リ オ ・ マ レ ガ 資 料	02. 諸資料 (413)	01. 白杵藩 (17)	01. 御納戸 (8) 02. 御奥 (2) 03. 郡奉行 (1) 04. その他 (6)
		02. 白杵藩士 (126)	01. 戸上家 (116) 02. 生野家 (4) 03. 諸家 (6)
		03. 白杵藩領 (19)	
		04. 岡藩関係 (43)	
		05. 府内藩関係 (19)	
		06. 大村藩関係カ (3)	
		07. 杵築町・藩関係 (8)	
		08. 生地・宗近組関係 (40)	
		09. 大坂町奉行カ (2)	
		10. 駿河国安倍郡腰越村 (4)	
		11. 出羽国最上郡泉田村奥山家 (49)	
		12. 銀札 (21)	
		13. その他 (62)	

る場合もあった。グループ名称は資料の内容などから適宜判断して付与したものであり、マレガが与えたものではない。入手先は多くが不明であるが、たとえば01.白杵藩 (17) のうち01.御納戸 (8) には、大分市堀川町にあったハレルヤ書店の値札 (A13.11.0.2) が添えられており、同書店での購入といえる。また、資料A1.9.2.1.1.4には、イタリア語で「元山 (長崎) から購入した諸文書」との記載が見られ、大分・長崎などの古書店で購入していたことが確認できる。もちろん、個人的な譲り受けなども十分に考えられるところである。入手時期は、多くがバチカン図書館に寄贈された1953年以前ということになる。

13からなる資料グループのいくつかについて紹介するならば、01.白杵藩は、御納戸・御奥・郡奉行などの資料からなる。宗門方が所持した可能性についても検討したが、詰所日記など無関係なものも多く、別途入手したものと考えて、諸資料のなかに位置づけた。02.白杵藩士 (126) は、01.戸上家 (116)、02.生野家 (4)、03.諸家 (6) によって構成した。01.戸上家の入手経緯・時期などは不明である。また、同家文書は、A13.2.1 (63件)、A21.1.5 (1件)、A21.1.9 (26件)、

A24.57～71（24件）など複数に分れて存在した。構造分析ではこれらを集めて01.戸上家とした。資料の上限は元禄5年（1692）、下限は明治24年（1891）とみられる（氏名などが具体的に記される資料の下限は明治15年である）。戸上姓の者には戸上権助（元禄～宝永）、戸上嘉助（文化2年、天保13年、弘化、嘉永、安政、元治）、戸上幾平太（天保8・9年）、戸上秀橘（明治11～15年）などの名前が見られる。また資料には同家の土地取得に関する売買証文などが多いが、同家は臼杵藩にあって御部屋足輕、御持筒組、大組などを務め、戸上幾平太は「宗門方御附人」に就任したとみられる¹⁰⁾。ただし、01.戸上家に、宗門方の事務にかかわる資料はほとんど見られない。既述の通り江戸時代から明治時代の戸上家の土地売買に関する資料が大半を占めることから、出所は戸上家と見て間違いなからう。

03.臼杵藩領（19）は、マレガ自身が資料目録ノート（A.16.4.4.1.1）に「断片的な資料で、襖から剝がし、販売者が一つにまとめた資料群」と記し、B421からB440の資料番号を与えたものである¹¹⁾。内容的に主に臼杵藩領のものであるため、「臼杵藩領」の柱を設定した。

04.岡藩関係（43）、05.府内藩関係（19）、06.大村藩関係カ（3）、07.杵築町・藩関係（8）、08.生地・宗近組関係（40）などのまとまりも資料内容から判断したものであり、マレガによる入手時期、厳密な意味での出所は不明である。

09.大坂町奉行カ（2）、10.駿河国安倍郡腰越村（4）、11.出羽国最上郡泉田村奥山家（49）などは、豊後はもちろんのこと九州からも離れた地域の資料ということになる。また、11.出羽国最上郡泉田村奥山家は、キリシタン・宗門改とも無関係である。これらは、いずれも2005年頃まで東京調布のサレジオ神学院に保管されたA24のうちの文書群であり、マレガが東京で入手した可能性も考えられる。点数が多い11.出羽国最上郡泉田村奥山家（49）は、宝暦14年（1764）から慶応4年（1868）に至る村方の庄屋文書である。「泉田村庄屋奥山仁兵衛」などの記載も見られる¹²⁾。

(3) 03.マレガ

「03.マレガ」は、マリオ・マレガ自身を出所とする資料類であり、著書・原

稿・研究メモ・ノート、資料整理封筒・包紙、さらに、マレガの半生絵巻、絵葉書などからなる。印刷物を除く資料から直接確認できる上限は、1938年である（これを遡るものに「1936」と記される封筒が一点ある）。下限は印刷物を除くと1949年7月「別府専門女学校給与明細（昭和24年7月分）」（A1.20.8.1）であり、印刷物を含めると大分県郷土文化研究会「大分県先賢名家人名辞典」（1949年）、「聖ザヴィエル師渡来四百年祭記念 豊後キリシタン史展覧会出品目録」（展覧会は1949年5月27日～6月5日、主催は大分県・大分市・別府市・朝日新聞西部本社、会場は大分市トキハ百貨店五階ホール）、それから後述の1950年の新聞などがある。マレガは、1945年8月の終戦以降、東京（1946、1949～53、1959～74）、イタリア（1947～48）、大分（1948～49、1953～1959）と頻繁に移動するが、資料群がこの間どのように管理されたものか曖昧である。なお、上述の1949年の大分の資料は、マレガが同時期大分教会に所属したことによると考えられる。同年代の資料はきわめて少数である点も特徴といえる。

さて、以上の点も念頭に「03.マレガ」のもとに7つの小グループを設定した。01.研究（574）、02.文書（29）、03.資料管理（1442）、04.図書（136）、05.印刷物（43）、06.諸品（11）、07.布教関係（1）である（後掲表3参照）。宣教活動などに関する資料も一部見られるが、裏面をメモ用紙として利用する場合が大半であり、自覚的に保存されたものではない。基本的にバチカン図書館に寄贈された資料は、豊後のキリシタン関係資料などと、それらに対するマレガの取組みを示す資料といえる。たとえばA1、A2には、『豊後切支丹史料』（正・続）に収録した資料とともに、史料集刊行のための原稿や作業メモなどが大量に見られ、他の古文書のまとまりとは様相を異にする。マレガによる利用が進むほどマレガ神父のメモが大量に付与されたわけである。古文書とマレガのメモ・原稿などとはそのような関係といえる。なお、マレガのメモ書きはその大半がイタリア語である。

01.研究はマレガ自身の著書（『豊後切支丹史料』正・続）、原稿などであり、02.文書は書簡、大学給料明細、マレガ半生絵巻などからなる。半生絵巻は1945年7月、熊本の栃木温泉に留められたさい、マレガ自身が誕生から当時までの歴史を墨絵（漫画絵）で描いたものである。

03. 資料管理は、マレガが収集資料の整理・管理に用いたものである。資料に添えられたメモ書き、カード、資料番号が書かれた封筒、ツツミ紙、包装に用いた新聞、紐（麻紐など）などからなる。新聞は「The Osaka Mainichi & The Tokyo Nichi Nichi」「豊州新報」「大分新聞」「大分合同新聞」「The Mainichi」「日本カトリック新聞」「大分日日新聞」「福岡日日新聞」「朝日新聞」などであり、いずれも日本の新聞である。確認できた新聞の日付は1937年11月から1950年1月にいたるが、多くは1944年までのものである。これは1944年7月、戦火を避け資料を大分から宮崎に疎開させたこととの関連が考えられる。大分のマレガのもとにあったジュセッペ・フィグラの回想録には「昭和19年の終わりから20年のはじめにかけて、空襲はいよいよはげしくなってきました。……マレガ神父様は、白杵のキリシタンの資料を持っていました。「あれは爆撃でやられるのは惜しい」といって、一週間もかけて、全部箱におさめて宮崎に送りました¹³⁾」とある。その後のマレガの動向などに鑑みても、宮崎に疎開するためにまとめた荷物は、移動するさいに便利なものとして一定程度維持されたことも考えられる。保存管理に用いた新聞の大半が1944年7月の疎開までであるのは、この点とも関連するものであろう。なお、1944年7月以降、包材として利用された新聞は2件確認できる。一つは1949年9月16日のアメリカ軍新聞「STARS AND STRIPES」(A21.1.1.2.0)であり、「中川車紋軒丸瓦」(キリシタン瓦)を包み、マレガによる説明文が添えられている。新聞の日付に従えば、マレガが大分教会赴任時に入手したことになる。もう一点は昭和25年1月12日「朝日新聞」(A13.10.0)であり、成田山のお守りを包む。

以上のような状況からは、戦後に追加されたものが存在することも明らかであるが、それは江戸時代の古文書類などではなく、戦後、とくに1949年の大分教会時代のものが多いように思われる。つまり、新聞などの情報を踏まえて捉えるならば、バチカン図書館のマレガ資料群は、1944年7月までの江戸時代の書類を中心とする資料群と、1949年頃の大分教会時代の資料群、1950年頃に東京において発生した少量の資料群によって構成されたと想定することも可能ではなかろうか。

04. 図書は、写本・文献・雑誌などであり、教会関係の小冊子なども含まれる。

表3 マリオ・マレガ資料群構造 —03.マレガ、04. その他—

フ ォ ン ド	サブ・ フ ォ ン ド	シリーズ (掛・機能レベル)	ファイル (内容別・簿 冊レベル)
マ リ オ ・ マ レ ガ 資 料	03.マレガ (2236)	01.研究 (574)	01.メモ (476)
			02.著書 (3)
			03.原稿 (69)
			04.書籍 (2)
			05.包紙 (1)
			06.絵図 (4)
			07.新聞切抜 (19)
		02.文書 (29)	01.書簡 (12)
			02.学校教育 (9)
			03.通達 (2)
			04.マレガ半生絵巻 (5)
			05.マレガ写真 (1)
		03.資料管理 (1442)	01.メモ (286)
			02.日本語カード (75)
			03.ノート (1)
			04.葉書 (8)
			05.青焼図面 (3)
			06.チラシ (1)
			07.紙片 (45)
			08.封筒 (337)
			09.ツツミ紙 (281)
			10.新聞 (199)
			11.カード (8)
			12.紐 (186)
			13.仕切り紙 (10)
			14.カタログ (2)
		04.図書 (136)	01.写本 (13)
			02.文献 (120)
03.雑誌 (3)			
05.印刷物 (43)	01.絵葉書 (37)		
	02.その他 (6)		
06.諸品 (11)			
07.布教関係 (1)			
04.その他 (56)	01.バチカン図書館整理 (56)	01.新聞 (7)	
		02.カード (48)	
		03.メモ (1)	

時期的には江戸期から1949年に至り、マレガの書き込みなども見られる。

05.印刷物は、観光絵葉書などが大半である。06.諸品は、お守り、瓦、御札、矢尻などのモノ資料である。以上を表示すれば、表3の通りである。

(4) 04. その他

「04.その他」(56)では、バチカン図書館が資料群受入れ後の1950年代後半から60年代に、資料管理などの過程で付与した装備具などを3つのグループに編成した(表3参照)。01.新聞はバチカン・イタリアの新聞紙である。具体的にはA9.1の資料群はIL Popolo del Lunedì(1959年6月22日)(A9.1.0.1)で、A11.2の資料群はIL Messaggero dello sport(1959年6月15日)(A11.2.0.1)で、A11.2.3の資料群はIL Popolo del Lunedì(1959年6月22日)(A11.2.3.0.1)で、A14の資料群はバチカンの公式新聞ともいえるL'osservatore Romano(1959年6月21日)(A14.0.1)で、A20.2の資料群はIL TEMPO(1959年5月17日)(A20.2.0.1)で包まれた。新聞の日付からも、資料を包む行為がバチカンで行われたことは明らかである。また、バチカンでの新聞紙利用は、A9.1、A11.2、A14、A20.2というようになかなか大きなまとまりを包む場合に利用されているのも特徴である(新聞を新規に利用せず、マレガが用いた装備具を転用することもあったと考えられる)。なお、包まれた構成物レベルではマレガの整理状態や白杵藩の文書管理状態が維持されているようである。今後、より丁寧な分析によって資料管理や伝来について一層明らかになることが期待される。

02.カードは、バチカンにおいて設定された21のグループ、およびその下の小グループなどに添えられたものである。イタリア新聞が利用された時期と同時期の措置と考えられるが、詳細は不明である。

03.メモは、1938年、マレガの上司であるヴィンチェンツォ・チマッティ神父がバチカンを訪問した際に持参した資料群(A26)に関するバチカンでのメモ書きである。¹⁴⁾

おわりに

バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ資料群の全体像をアーカイブズ活動の観点から階層構造的に捉え、分析での検討なども含め紹介してきたが、残された課題は少なくない。一つは臼杵藩宗門方役所の機能についての分析がまだ不足していることである。幕府の指示によって諸藩に置かれた宗門方に関する分析は、本資料群の発見によって進展をみたとすることもできるが、役所の組織・機能に関する研究は引き続き必要と考えられ、その進展によって資料群の構造的な把握もより適切なものになるに違いない。

また、マレガについては、1938年から1953年にかけての動向を一層追究することが重要といえる。さらにマレガは、なぜ1938年に宗門方資料群を取得できたのか、事実関係と同時に当時の日本・大分における歴史資料についての社会的な認識などを含めて検討することが重要であろう。こうした基本的な情報が的確に提供されることで、本資料群の情報としての価値が一層高まることになる。実現には利用者との連携も欠かせないと考えられるのである。

註

- 1) サレジオ大学図書館所蔵の資料群については、湯上良「サレジオ大学図書館所蔵マレガ関連資料に見るマレガによる研究と資料保護」（本書所収）を参照されたい。また、和古書については山下則子「サレジオ大学マリオ・マレガ文庫蔵日本書籍目録」（国文学研究資料館文献資料部編『調査研究報告』第23号、2002年）がある。また、ロバート・キャンベル「マリオ・マレガ文庫」（『文学』2001年5、6月号、岩波書店）が概要を紹介する。
- 2) 国文学研究資料館ホームページ「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ資料データベース」参照。
- 3) マリオ・マレガの経歴・業績については、シルヴィオ・ヴィータ「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父—マレガ文書群の成立過程とその背景—」（『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第12号、2016年）、同「マリオ・マレガの執筆活動とその『文脈』」（『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第14号、2018年）、および本書所収同論文参照。また、星美学園短期大学小島順子氏の御教示による。
- 4) 収集およびマレガの動向については、シルヴィオ・ヴィータ「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父—マレガ文書群の成立過程とその背景—」（本書所収）参照。
- 5) これらの詳細は、マレガ・プロジェクト『バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ資料—概要と紹介—』（2021年）を参照されたい。なお、同書は国文学研究資料館マレガ・プロジェクト・

ホームページにもPDFが搭載される。

- 6) 三野行徳「白杵藩宗門方役所とキリシタン統制」(本書所収)、佐藤晃洋「白杵藩におけるキリシタン禁制政策と民衆統制」(同上)を参照。
- 7) 註6三野論文参照。
- 8) 太田尚宏「白杵藩宗門方役所における文書管理の諸相—収納袋・端裏書・保存形態に着目して—」(本書所収)参照。
- 9) 白杵藩宗門方役所をこのグループに入れることも考えられたが、同資料群がマレガ収集資料の大半を占めること、また、マレガの原稿・メモ・書簡などもこの文書群にかかわることに鑑み、原出所である白杵藩宗門方については、これを別個のグループとした。
- 10) 足軽などについては、マレガ資料A13.2.1.1.1参照。宗門方御附人については、包紙表書に「宗門方御附人 戸上幾平太様 佐藤伝兵衛」(A14.4.1.6.0)とある。ただし、包紙のみである。
- 11) 高見純「宣教師による切支丹統制文書群の収集と整理—マレガ目録の分析から—」(本書所収)、表2参照。
- 12) マレガ資料A24.72.3.18参照。
- 13) 世のひかり社編『戦争中の一神父のてがら フィグラ神父の回想(1940～47年)』(世のひかり社、1994年)、シルヴィオ・ヴィータ「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父—マレガ文書群の成立過程とその背景—」(『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第12号、2016年)、および本書所収同論文。
- 14) A26の伝来については、青木睦・太田尚宏・大友一雄「マレガ資料群の調査・保存と情報資源化」(本書所収)参照。